

道 標

どうひょう

d o h y o

年間特集「おしえ」

第二回・不二の妙薬

江里 尚樹さん

連載

あなたのいのちの物語

伝承を科学する

道しるべ

回復を拒む深い痛み

能の笛（能管）の喉の音と響き

自坊の門徒報恩講

2025 春季号



年間特集 「おしえ」

不二の妙薬

第二回 江里尚樹さん



「うつわ - 青」 生命のうつわシリーズより

私たちの住む世界は、日に日に便利になり、お金と交換に様々なかたちの「安心」を手に入れることができるようになりました。衣食住をはじめ、保険や旅行も「安心」や「心の癒し」として、現代の生活ではほぼ必要不可欠な要素となっていると思われる。

私はインドで20年生活しています。人の心の在り方を学び、探究をしているつもりではあっても、不動の安心などは無いということを毎日のように学ばされます。感情は止め

いるのだと思います。私にとって師とはインドの大地であるとも思っています。

インドに根付いているヒンドゥーの教えは日本の神道に似ており、長い間「教え」というものは口伝として伝えられ、時間をかけて少しずつ形成され、それが宗教となり今日に至っています。寧ろそれは自然や共同体にて生きるための科学、智慧の集積であり、求道者たちの道標みちしるべのようなものであったと考えられます。

ヒンドゥー教の思想を代表する

どなく動き続けるものであり、自分の自我や感情の動きを見つめることができる、もう一つの静かな目がなければ、日常の混沌の渦に簡単に飲み込まれてしまいます。私のように芸術に携わり、物の心の両立する道を求めているものには近道などなく、地道で正直に歩む道しかないということを、日々の生活を自己の鏡として、またそれを師として学ばせていただいているのだと思います。私にとって師とはインドの大地であるとも思っています。

不二一元論とは「この世の存在はすべてが一つに繋がって成り立っている」ということです。これはまた人間の自我が持つ、物事を分析・分断しつづけるという性質に対する処方薬のようなもので、内観を以て人間の自我中心の存在の小ささ、その限られた視野を認識、実証するものです。

人間の思考は常に分析と分別をする傾向にあります。乳幼児からの成

長過程で思考、記憶することによって徐々に「自と他」を区別していき、やがて自我が形成されてゆきます。人間のみが時間を意識し、永続的な安全や、遂には不死の命まで手に入れようとしています。それは動物たちには見られない独特な発達、進化です。そして人間のみが自己の安心・安全・利益の確保のために大きな規模でまわりの環境をも破壊します。それは常に安全、安心を求めるという全ての生き物に共通する生存本能をはるかに越えたものであるようです。

さて、日本では「間」の存在を古くから重んじてきました。それは日本の伝統文化の中核とも言え、神道、禅、書道、茶道、能をはじめとする古典芸能は、「間」を介しての対話であるとも考えられます。日常でも「間」の感覚がよくないと「間抜け」、拍子が悪いと「間が悪い」と言われ、「お笑い」も間が変だと笑えません。「阿吽の呼吸」といいますが、絶妙な「間」があつてこそ、その意味が成り立ちます。「間」は「無」とは

この世の存在はすべてが一つに繋がって成り立っている

違い、実際私たちの生活の中に存在しているのです。「間」の存在に触れるということは、言葉なき自然との対話でもあり、同時に自身との深い対話であるとも言えるのではないのでしょうか。

二元的な思考はその「間」を省いてゆくことで前に進みます。「間」を無視することでニュアンスも失ってゆきます。「白と黒はこのような違いがある」という二元的思考は、色と色の間に無数に存在する「間」の色を無くしてしまいます。それは「白黒」のみではなく、「自と他」「肉体と精神」「東洋と西洋」「善と悪」「神と人」などとも置き換えることもできると思います。日本の精神性と文化は「間」を通じて、全ての繋がり、不二を静かに暗示します。

内観や瞑想というものは、まさにこころの科学研究所での分析や測量のようなものだと思います。自他二元の存在に追い回されたり、結果や結論を得ることのみに走ることでかえって迷走してしまいます。つまり、問題と答えという簡単な二元の図式のみでは「この世界の存在の謎は解けない」「生命の不思議には近

「間」の存在に触れる。それは言葉なき 自然との対話 自身との対話

づけない」。そうした理解の根幹がインドに古くから伝わるヴェーダンのタの不二一元論なのです。

誤解を恐れずに申し上げると、善か悪かを裁くにも善の中に悪を見出すこともできれば、悪の中に潜む善も存在するのです。個人主義に基づいた思想や哲学の多くは二元世界から出発します。しかしこの世界は決して二元のみでは形成されておらず、見えないものの領域のほうが圧倒的に大きいのです。

大きな天災には人類は敵わないこととはわかっていますが、人災を完全になくすことができるほど人間の進

化はまだ進んでいません。数多くの核の保有、止まない戦争、宗教間の対立や環境破壊はその極端な例ではないでしょうか？

先進国と呼ばれても、私たちは資本主義、消費社会、また合理主義という基準によりもたらされた便利さや効率優先、そして競争からの副産物として生み出された破壊行為からの抜け道へはまだまだ達していません。共存に焦点を置いた文明を目標に、早急に新たな社会を築かねば地球上での命の存続は現実的に無理であると思います。

インドの「不二一元」と日本の「間



「星の種」 超越する光の考古学シリーズより

の文化」には、「不可視の存在を介して、全てはすでにつながっている」という存在のあり方に基づいているという点で、よく似ていると思います。不二一元の精神は近視眼的で、

分析・分断を繰り返し、常に過剰にはしる傾向がある人類へ太古から贈られた妙薬であると思います。しかしそれは飲めばすぐ効き、病が治るというようなものではありません。薬と心と体が対話をしながら効かせてゆくアーユルヴェーダや漢方のような薬であるのだと思います。

世界は今、混沌を極めていきます。こうして一つの時代が終わり、かつての常識も大きく変化していきます。私は日本人として、アジアの一住民として、そして地球という稀有な生命体の一員として、未来のために今何ができるのかを日々自らに問いかけながら、日常生活と、創作活動を実践の場としています。

江里尚樹（えりなおき）

藝術家

京都の仏教美術に携わる家庭に生まれる。東京と京都での伝統彫刻の修行。日本とイギリスで大乗仏教を学び、インドにてチベット仏教、インド哲学やヨーガと出会う。2005年より南インドの国際都市オーロヴィルを拠点にアート、デザインなどの創作活動を行っている。 jyotinaokeri.com

Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

28話目

回復を拒む深い痛み

ハン・ガン

「回復する人間」

二〇二四年度のノーベル文学賞を受賞した韓国の女性作家ハン・ガンの短編だ。「あなた」とよばれる主人公が踝の下を痛めている。もとは捻挫のようだが、その治療のため韓方医院に行ってお灸をすえてもらったがそれが火傷になった。それから五日後に訪れた整形外科医からは厳しく冷たい態度で応じられる。「あなた」はほんとうは両親を訪ねて慰めを感じてもらわなくてはならないのだが、しないですませようとしている。一人でいたいのだ。

この足の痛みは、「あなた」の姉の死後に始まった。姉が病氣と闘っていた最後の三か月、妹はほとんど会いに行けなかった。彼女がそれを望まなかったからだ。ずっと前から疎遠だった。たった二人の実の姉だが、彼女の容態について母さんから聞くことしかできなかった。

くそまじめで頑固で、大学も地

味な学科を選び、平凡な容姿で恋愛経験も乏しく、両親との関係がよくなって経済的援助も受けられずにいる三〇歳過ぎの「あなた」。

一方、容姿もよく、順調に会社経営の男性と結ばれ高級マンションに暮らす姉。ところが姉の方が妹に對し劣等感をもち、妹の欠点ともいうべきところを姉は嫉妬したという。

妹が入学するとき、姉は高級レストランに連れていき、社会通念上、高級に見えるようになるための助言をあれこれしたが、妹は納得しなかった。二人が大学の四年生と二年生のとき、姉が人工妊娠手術のために病院に行くのにおともした。だが、これ以来、姉は妹と言葉を交わすことなく、目さえ合わさなくなってしまった。

「あなた」が初任給でプレゼントしたスカーフを、彼女が包装も開けずに黙って返した瞬間は忘れることができない。「あなたが彼女に永遠に背中を向けようと心を決めたあの瞬間」。「あのときあなたはどうすればよかったのか。自分もまた恐ろしいほど冷たい人間だという事実を驚きとともに発見する代わりに

何を、ほかのどんな方法を見出すべきだったのか」。

繰り返される不妊治療でも子どもができなかった姉がどのような病で死に至ったのか、作者は記していない。最期が近づく姉は痛みに悲鳴を上げ、父のあごがわなわなと震え、義兄が後ろを向いて泣き、母が娘の手を包み名前を呼び続けた。「あなたは自分を責めずにいられた。あなたの存在が彼女の最期の瞬間を台無しにしていると思うことをやめられなかった。お姉ちゃん、とついに震える唇を開いて言おうとしたとき、もうすべては

終わったあとだった」。

姉の希望にそった埋葬（土葬）が終わるまでに母は何度も地べたにしがみ込んだ。母さんの脇を支えて降りてきた「あなた」は足をひどく挫いた。その痛みを癒そうと努めてきたのだが、心の底には回復することを拒むものがある。自分を回復させないでほしいと「誰に向けたのでもない祈りの言葉を口の中でつぶやきつづける」。

主人公は、もともと親しい肉親のひとりである姉を自分の存在そのものが傷つけてきたと思う痛みからすっかり回復してしまうことはできないと感じている。魂の痛みというべきものだろう。短い物語だが、傷つき痛み回復する経験の深みが鮮烈に写し取られている。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンフケア研究所客員所長、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくって“もいいですか”』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。



伝承を科学

する

能の笛（能管）の喉の音と響き

能楽の囃子の中で唯一、旋律を奏でることができる楽器が、能管である。能管は竹製の横笛で、吹き穴（歌口）と、七つの指穴がある。外側には、籐の蔓などが巻かれ、漆を使って精巧に作り上げられている。見た目は、雅楽で用いられる龍笛などの横笛と変わらないが、じつは能管には、他の笛には見られない独特な工夫がある。

能管の旋律は、まるで自然の風の音や虫の音のように、陰ながら主人公の心情や謡の言葉を彩る響きになるのである。

き渡り、沈黙が破られる。それに続き、大鼓や小鼓の掛け声と打音が次々と発せられ、音楽の流れにのって人物が登場する。

特徴の二つ目は、ヒシギと呼ばれる甲高い音である。ヒシギは、たんに高音というだけではない。独特の指遣い（クロスフィンガリング）によって、いくつかの倍音が重なり合って出てくる音である。

じつはヒシギはもともと、開始を知らせる合図の音だった。だがその音には、神の出現を促す意味合いも込められるようになってきた。

たとえば、高天の原で天照大神が天の岩戸に隠れ、その前で天のウズメが舞う神楽の場面。その神楽の最終部分には、旋律の中に突如、「ヒー」という甲高いヒシギの音が挿入される。

吹き穴の部分と指穴の部分をつ

強く息を吹き込むために息の雑

音がまざる。ヒシギという言葉は、

動く「拉ぐ（ひしぐ）」（＝押し

付けてつぶす）か

ら来ている。名前にぴったりの音であると言えよう。

喉（歌管）によって、音の上にも

特徴が生まれた。二つ目は、同じ指

遣いで得られる低音域の音と高音域

の音とが、一オクターブにならず狭い

間隔になることである。能管は吹

き穴も指穴も大きく、吹き方でピッチが大きく変わる。

そのため、出てくる旋律は、言

語の高低イントネーション変化に近

い、あるいは能楽の謡にも近い、ピッチの揺らぎを含んだ独自の旋律に

響

き

する

なる。能管の旋律は、まるで自然

の風の音や虫の音のように、陰なが

ら主人公の心情や謡の言葉を彩る

響きになるのである。

特徴の二つ目は、ヒシギと呼ばれ

る甲高い音である。ヒシギは、たんに高音というだけではない。独特の指遣い（クロスフィンガリング）によって、いくつかの倍音が重なり合って出てくる音である。

じつはヒシギはもともと、開始を

知らせる合図の音だった。だがその

音には、神の出現を促す意味合いも込められるようになってきた。

たとえば、高天の原で天照大神

が天の岩戸に隠れ、その前で天のウ

ズメが舞う神楽の場面。その神楽

の最終部分には、旋律の中に突如、

「ヒー」という甲高いヒシギの音が

挿入される。

言い伝えによ

ると、それは天

の岩戸が一瞬間

き、光が差し込

む様子を象徴す

る、とのこと。

たとえ後付けの

話だとしても、

耳を覚まさせる

ヒシギは、神の

出現を予告する

閃光のように響



能管とその部分名称の図（個人蔵）

能の最後にも、このヒシギが演奏される。じつは、この最後のヒシギも、楽屋に対して「次の番組の準備をせよ」という合図の音だったらしい。しかし現代、最後のヒシギ「ヒーヤーヒー」は、能の終わりの静寂を、より深い静寂として感じさせ、物語の余韻を舞台に満たしてくる作用を持つ響きと、感じられるように変化してきた。

能管の喉という工夫は、能管に独特な音を与えた。そして能管の演奏家たちは、独特な音そして旋律を、能楽の場面場面や人物の心情をより深く彩ることができるよう豊かな響きへと進化させたのである。

藤田隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

◆ 自坊の門徒報恩講

筆者の自坊は大阪市内の東南の端に当たっている。一月は親鸞聖人の御正忌報恩講の月である。全国の真宗寺院では御正忌が勤められる。ただ、近畿圏では本山の御正忌報恩講に重なることから、前年の年末までに勤めることが「お取り越し」と称して般化している。

我が寺では、本山の御正忌につけて、各門徒の報恩講が勤められている。地方によれば当然のことであるが、悲しいことに大阪市内ではほとんど聞くことができなくなっている。そんな中で我が寺では、現在も古くからの門徒さんで報恩講が勤められている。大阪市内では珍しいことになってしまった。ただし、これには大きな理由がある。

太平洋戦争の最中、食糧不足は大阪の外の村にも押し寄せてきた。当時は門徒報恩講では、早朝から住職はもちろん各家庭から必ず一人ずつが出て、講中の家々を二日かけて巡番に参詣して「正信偈六首引」を一緒に勤めたそうである。最後の家では巡番制で「お斎」がとるまわっていた。

前々住職の時代である。総代さんが「御院さん報恩講さんが勤められませんか」と、申し出られたそうだった。筆者にとって義理の祖父に当たる前々住職は、極めて厳格な人柄だったようである。「それは報恩講が勤められんではなく、お斎の準備がきかないということであ

あろう。だったら、お斎を略して皆でお勤めをすれば、報恩講は続けることはできる」と、たしなめられたと聞いている。その三言のおかげで自坊の門徒報恩講は今日までつづけられている。まことに有難いといわねばならない。

現在では、門徒が住職と一緒に参することはなくなっているが、各家庭では赤い蠟燭を灯し、赤飯を供え、松を真に仏華を調えて、親の年忌よりも大切にお莊厳をする気持ちで勤めている。住職の厳格な言葉が今に至って生きている。一見物わかりのよい住職だったら戦争という大きな風潮に流されて、大事なものを見落としてしまつていたと思う。前々住職は大変怖かったと古くからの門徒方から聞いている。見習いたいがなかなか難しい。

コロナが五類に指定されて感染の脅威が薄れてきて、日常の生活状況はもうインバウンドに至るまで、ものすごい勢いでもどつてきている。ところが寺院は従来のようにもどいていない。参詣者は少ないままである。また、法座の回数も自粛した時ままの寺が多い。ただ、この五年間の間に大勢の方が亡くなられている。そのために参詣が減ったのも理由の一つかも知れないが、それにしても参詣、お聴聞が少なくなつた。寺を預かる住職として、このままでは親鸞聖人に申し訳がない。嫌がられるような住職となつても、門徒の方々が寺に参つてくださるように、声をかけ続けねばと切実に思う日々である。

編集後記

三十年前くらい私のお寺でもヨガ教室を開いていたことがある。仕事帰りの若い女性でたいそう賑わっていたが、オウム的事件以降ぱったりと来なくなつてしまった。そんな時、ヨガを愛する某人が、「本当のヨガを」とヴェーダーンタ協会のインド人先生を招いてヨガ講師向けの講座をしたいということでお寺をお貸しした。それは体操ではなく、ヨガの思想やヒンドゥー教の宗教観のお話であった。そこで初めてヨガが神への道、修養法であることを知った。その中で難しいであろう仏教用語らしき言葉が平易に語られ、仏教がインド発祥、そして共通の基盤をもつものと新鮮かつ改めて認識したことを憶えている。

さて『不二』の教えも仏教を通じて日本人に根を深く下ろしている。「解脱の光輪きはもなし／光触かむるものはみな／有無をはなるとのべたもふ／平等覚に帰命せよ」と耳憶えであろう親鸞聖人のご和讃、その『不二』のお心を詠っておられるのではないか。再び鈴木大拙師の言葉である。「仏教では『一』ではなく『不二』といひます。『一』はやはり相対の数字です。対立は終わりません。自分さえよければと我を張れば争いになる」と。残念ながら世界はその真逆の方向を向いているようだ。 合掌

表紙の絵 バナナ供養

マングー供養（アムラバリー）の話は有名な。釈尊がたびたび説法に行かれたリッチャヴィ族の都ヴァイシャリーのアムラバリーの話である。先に声をかけた彼女の食事を優先し、男性貴族たちの接待を辞退された話である。現在のビハール州の州都パトナ（パトリプトラ）のガンジス河の対岸は昔からハジブルケラといつてバナナ林が広がる。出家者は食物を乞食して得るが、バナナも多かったと推察する。この絵は2025年3月8日〜6月22日に京都の相国寺承天閣美術館で開催される「畠中光享日本画展 清浄光明を描く」展の出品作で、ポスターにも使用される。

畠中光享（はたなか こうきょう）

日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
townページ <http://ntbj.itp.ne.jp/0667717007/>（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
（四天王寺西門交差点 西へ30m）

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。

行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。